

白羊の見る虚囚夢

第一章 男Tの現実

「一 逃亡」

井本元義

その男Tの父は、第二次大戦の終戦の二年ほど前にタイのバンコックに転属になった。タイは日本の占領国ではなく、友好国として日本軍の駐留を認めていた。両国の緊張関係は続いていたが、戦火を交えることはなかった。ただ、駐留日本軍一人人に対してタイ国軍は十五万人であったので、両国の関係のねじれや他国の戦況いかんでは、その先はどうなるかは分からなかった。

父はそれまで内地で軍の指導教官や経理事務の仕事をしていたらしい。生れたばかりのTと三歳上の姉を残したまま赴任した。そして終戦の数日後にバンコックで消息を絶った。

一説によると、大本営参謀の辻政信という武官が敗戦の直後に数名の部下を連れてタイの僧侶になつて地下へ潜つたという事だった。動機や使命がなんであつたか、また成果がどうだったのか、わからぬまま七年後に辻は一人で日本に帰還した。父は辻の部下の一人だったと推測された。父の消息は分からないままだった。

帰還後、辻は国会議員に立候補した。母はその機会にとTを連れて会いに行った。その時のことはTにはいつまでも残った。母との話はよく分からなかったが、黒縁の丸眼鏡の丸



坊主の印象は、不気味な謎を秘めているようでもあったがやや胡散臭い感じでもあった。Tは好きではなかった。記憶にないが優しかった父を連れ去って、消してしまっただと思われた。母はしつこく質問を繰り返した。短い時間だったが、辻は話しながら涙も拭いた。Tには空々しかった。

辻の話では、終戦の混乱の中、上官からの頼みで実社会を捨てて潜行したとのことだった。おめおめと敗残将校か捕虜となるよりは、潜伏して事あれば再び立ち上がるという気持ちもあつた。十年後の日本のためにアジアに潜行して何か新しい道を探ってくれという上官の言葉にも同感した。

また台湾の政情はあやしく、知己の広い辻には方々から招聘の依頼があるはずだった。若い見習士官などから希望者が出て、八人ほどの部下を選んでタイの僧侶になった。黄色い僧服と剃り上げた青い頭はまた馴染んではいなかった。

上司の中將H氏は、敗戦の事務処理を済ませ、英国軍の召喚の前日、親しい部下との夕食を済ますと深夜割腹した。

しかし本体を隠しての日々は危険でありかなりの無理があつた。各地の拠点にいるはずの知り合いや友人はすでに姿をくらましていた。部下の危険を避けるため、タイで数人の部下を残し、ヴェトナム、インドシナ半島の危険な行程を経て、中国の昆明についた時は、部下はTの父一人になっていた。父はそこで辻と別れた。

父は昆明のさらに南方にある隠れた集落を訪ねて行つたということだった。終戦間際に昆明のある雲南省とビルマの国

境に近い拉孟という地域で日本軍の部隊が全滅したと言われていた。だが、全滅の前に十数名が脱走しその集落にかくまわれ、終戦時にはさらに南方に逃げて行つたということがあつた。父の親しい友人か部下か教え子がそこにいたらしく、救えるなら役に立ちたいと言って彼はそちらに向かった。そのあたりには少数民族の集落が点在していて、その一つのハニ族が日本民族のルーツであると戦前の研究者が発表したことがあつた。そこに敗残兵が潜伏しているという噂があつた。どこまでが本場の事かわからない。母は辻の涙の陰に納得のいかないものを感じていた。何かを隠している、とうすら寒いものを感じるのを禁じえなかつた。

ただ彼らは長い潜行の道程の中で、失敗や裏切りなど惨酷な場面を何度も切り抜けて来たに違いない。何人かは命を落としそのまま捨てられたかもしれない。父も誰かの裏切りによつて落命したかもしれない。それが無惨であつたので辻は真実を語らなかつたのではないか。あるいは父が彼らを裏切り、仲間を抜けて現地の人間として生き延びているかもしれない。逃亡か落命かどちらにしる、素直に彼の話信じることができなかつたが、すぎるものは他になかつた。

Tは後になつて母が話すことでそれらを少しずつ知るようになったが、その背後に辻の空疎な影が見えて消えなかつた。ただその嘘っぽい話ながら、中国の奥地の拉孟や昆明という音の響きに、その悲劇を越えた夢のような土地が浮かんできつた。それは神秘的でさえあつた。

昆明を後にした辻はその後重慶に行き蒋介石と会った。蒋介石は、日本人に復讐するな、と中国国内に放送したがそれは日本の残留兵が無謀な抵抗の戦闘を起こすのを宥めるためだったが、もう一つはその力を国民党の応援に使いたかったということもあった。国民党と中国共産党の争いの中で、辻は日本残留軍と国民党の協力体制を作ろうと奔走した。しかし蒋介石の国民党は破れ、新しい東洋の形を建設しようとする努力をした目論見はかなわず、辻は日本へ帰って来た。

辻は国会議員になつて仕事をしたが、数年後にまた東南アジアに渡つてラオスで姿を消し、そのまま謎の行方不明者となつた。再び潜行したとも秘密裏に暗殺されたともいわれたが分からない。

「二 その男T」

Tは幼少のころから内気で病弱だった。体調が狂うとすぐ熱を出して寝込んだ。良家の出身でおとなしい母と姉の二人に囲まれた、というより包まれて成長したTは柔らかな綿のような境遇から飛び立つことはできなかった。戦争未亡人の恩給遺族年金と少しの財産があり、華道の家元でまた和歌をたしなむ母との生活には不安はなかった。

友人たちと外で遊ぶより、自宅で母の傍で、姉とままごとをしたり、寝転んでいる方が楽しかった。二人に挟まれて寝る布団はこれ以上ない幸福感に満ちていた。夏の夜などはT

を無視して肌着のまま過ごす二人に性の目ざめを感じることは、当たり前前でことで悩むことでもなかった。女性の匂いも知った。その蠢きは心地よい暖かな水のように彼にまわりつく日々の些事だったが深く浸み込んでいた。それは二人の女性に最初は玩具のようにかわいがられ、後は男として無視されたということでもあった。

Tは成長しても何事も姉の指示に従った。叱られることが怖かった。それが気楽だったからだが、それに不満や不自然さを感じることはなかった。

母は父を誇りにして毎朝の念仏は欠かさなかった。仏壇の軍服の写真は厳しかった。Tは懐かしさを覚えるよりその前では委縮した。微かな記憶もあるかないか分からないくらいだったが、むしろ他を受け入れられない眼の光は、中国の奥地に消えていった未知の暗さを秘めていた。それはTの気力を削ぎ内気な怠惰な性格に育てた。

中学時代は成績も悪く、欠席も多かった。友人関係も希薄で部屋に閉じこもり音楽や読書に浸った。ラジオで西洋の古典音楽をこっそり聴いた。

Tの姉は母親に似て容姿は端麗で、活発なところは父親に似ていた。

進学高校に入ってもテニスに夢中で顔はいつも日焼けで輝いていた。廊下ですれ違う時の汗の匂いはTを惹きつけた。また男女を問わず気の合う同級生を自宅に連れてきて、読書会をしたりゲームに興じたり、ひと時も無駄にできなかった。

常に仲間たちの中心にいた。隣の部屋で談笑する明るい笑い声を聞いて、Tも嬉しかったが、それらが自分と関係のないことだと思ふとまた落ち込んだ。そして彼女への憧れを無理やりに胸の奥に押し込んだ。

Tが三流の私学高校に入学した時、姉は大学に入り家を出て自活することになった。家では母と二人暮らしになったが、少年のような生活はできなくなった。部屋に閉じこもり読書するしかなかった。

読書は中国ものだった。明や清の末期の怪奇小説集が手に入ったのが最初で、その類を書店や古本屋で漁りまわることになった。不思議な妖艶な物語が、読み進むと妙に現実味を帯びて心を奪われた。架空の物語が絹布のように体に纏いつき心地よいまま逃れられなかった。さらに淫猥で猟奇的なものを楽しんだのでますます他人との接触は避けるようになった。残酷な物語には、そこに落ち込んでいこうとしながら、避けようとしながら入口で躊躇し、結局は身を投げ込んでしまふのだった。そして後悔しながら快感の後の苦さにまた酔った。

古本屋では、戦前に刊行された馬賊物や阿片窟や娼館の退廃的な駄本も目に付いた。醜く貧しい人が意味もなく死んで行く。惨めではあるが悲劇的ではない、グロテスクで無意味な物語を描く著者にTはとくに共感を覚えた。

逆に想像する美しい女性は、細い眼の髪の短い清楚な支那服の夜服を着て微笑んでいた。絹の服は彼女の体形をさらに

艶めかしく浮き出させていた。夢では何度もその服を剥いだ。猥雑な時間は迷路のように続いた。しかしそれが今の現実の自分に起こりえないことを知ることは苦しかった。憧れても叶えられないことのないことは悲しい事でもあった。悶々とした夜が明けると、昼間のTには何の気力も残っていないかった。

高校を卒業すると父の知り合いの伝手で市役所で働くことになった。大学へ行く気もなかったし、母の年金だけでは姉と二人の学費を賄うことは難しかった。無理はしたくなかった。人生の希望もなかった。

そう難しくもない言いつけられた仕事をこなして、給与をもらう生活にはすぐに慣れた。満足だった。事務の下積みの仕事だったから責任もなかった。喰いたいものを食って酒も飲んで読書に浸る。先輩がからかい半分に連れて行ってくれた風俗店は給与を考えて規則的に通った。

何年か経って、あとになって思い出してもその頃何をしていたか記憶は全くない。誰と何を語り合ったか、思い出す懐かしさも興味もなかった。

ただあれは何年目の事だったろう。一つの出来事に巻き込まれてから、さらに彼は仕事をする意味や価値を失い、前任の仕事をしたその通りに踏襲することにした。もちろんそれ以外に彼にできることはなかった。

まだ働き始めて数年の頃、購買の用度係に勤務していた時だった。入札の準備の書類を作る仕事は前任が女性で引き継

ぎも十分にしなかった。市立病院の医療器材の入札にあたって、上司から指示の通りに数字を書いた紙をある業者にこっそり渡した。意味は分からなかったが、その上司から一度豪華な食事をごちそうになったことがある。その後上司は収賄罪で逮捕された。

Tも取り調べを受けたが、取調官は彼の無知に驚いた。無罪放免の処分だったが、その後彼は職場を転々としなければならなくなった。

だが彼は全く気にしなかった。どれも同じ下積みの仕事だった。

私生活では変化があった。母は短歌の結社の主催者の恋人になり、家族は疎遠になった。父の写真が倉庫に隠されているのを見てTは家を出た。父が死んでからもう二十年以上経っているのだ。Tに特別な感情はなかった。とくに自由になったという気持ちもなかった。

姉は高校の同級生と結婚していた。子供はなかった。義兄は薬学博士で漢方薬の研究をしていた。その道では第一人者ということだった。姉は心理学を勉強して臨床心理士で医療機関に勤めていた。Tは月に一度くらい彼等の家を訪ねるのが唯一の楽しみだった。義兄は彼を歓待してくれた。酒の間も楽しく、彼の専門についても嬉しそうに語ってくれた。義兄にジェラシーを覚えても仕方がないことだった。

「三 はじまり」

世の中は大きく変わろうとしていた。日本経済は飛躍の前触れに湧いていたが、中国は狂気の紅衛兵が全土を席卷していた。ヴェトナム戦争は果てなく人々が疲弊するだけで、隣国カンボジアでも政変がおこった。連合赤軍のテロリストたちが日航機をハイジャックして北朝鮮へ向かった。大阪万博が催され月面の石を見るため入場者は列を作った。Tは読んだことはなかったが、三島という作家が割腹したのもその頃だった。

義兄の家で度々会う中国人がいた。雲南省の出身ということとで、体格はがっしりしていて、頭は何時も丸刈りだった。眼は細く、笑うといかにも優しそうにまた細くなった。正直そうで精悍な顔つきで振舞も好感が持てた。家が裕福だったのか、私費の留学生ということだった。名前を高、カオさんと言った。義兄と組んで漢方の抗癌剤の効用をモルモットを使って研究しているということだった。

彼らが実験のやり方について議論をしている時もTは退屈せずに話を聞いていた。ある日、高さんが写真を見せてくれたことがある。

「これが、癌を死滅する薬草です、名前を、白花蛇舌草、バйкаジャゼツソウ、中国語ではバイファシェンエゾウと言います、中国にしかありません、これが写真です 葉が蛇の舌

のようでした。」

ぼんやりした写真でよく見えなかったが、Tは不思議な感覚に襲われた。細く伸びた数枚の葉、薄気味悪い蛇の舌のような葉の間に白い小さな花が顔をのぞかせている。花卉は四枚で先が尖っている。ボケた写真の中のさらなる薄闇の底に沈んでいる白い花。Tはかつて覚えたこともないような郷愁を覚えた。その白い花は神秘的でさえある。

その日からTは何度その白い色と夜ごとの夢に埋没して安らかに眠ったことだろう。中国娘の長い白いうなじに唇をつけ吸いながら、白い絹の支那服を脱がせる。汚れを知らない可憐な身体に手を触れてまた吸う。いやあれは安らかではなかった。夢でしか愛撫できないことに哀しみ、その苦しみに沈んで眠ったのだ。白い色、それはまた母や姉の肌着に包まれて眠った幼いころの性欲の始まりだった。

今まで意識しないように抑えていた鬱積した霧が、その白い小さな花に触発されて彼は混乱した。しかし夜になって布団に蹲るまでさらに抑えておかねばならなかった。

Tは定年までの四十二年間を市の職員として過ごした。数年ごとの異動で各所を回ったが、どこも希薄な記憶にしか残らなかった。仕事のやりがいなどは考えすらしなかった。日々の義務を黙々とこなす。当然友人などできなかったが、またそれを願ったりもしなかった。

用度課の次は、市の下請けである衛生公社へ出向になり数

年を過ごした。収賄事件の片割れとしての懲罰の意味もあつたかもしれない。運転免許も取れた。二日に一度の交代制であつたが、バキュームカーでの運転と操作だった。さすがに臭いには慣れるのに時間がかかったが、やっと慣れた時に異動になった。何年間だったかは記憶にない。

つぎも下請けの清掃会社の勤務だった。就業後の夜に市役所の全館を清掃した。床を拭く。集まった各課の塵を昼間に処理する。ゴミ箱に入ったものはより分けることはせず、すべて焼却場へ運ぶ。たまに財布が落ちていたりするが、同僚が黙ってくすねるのを見たりした。

その縁で次は焼却場の受付や事務だった。市の外れにできた焼却場は巨大だった。受付ではトラックで来る塵の確認と重量を計って許可を出した。他市からは断った。ゴミの中に動物や人の死骸がないことも確かめなければならなかった。近隣の反対はあつたが悪臭はせず、残った熱で大浴場ができ無料で開放された。Tは仕事が終わると毎日風呂へ入って満足だった。

下請けの警備会社では夜警周りや、時には役所の前で暴れたりする陳情団を抑制し、また駐車場の整理員を経験した。

営繕課では蛍光灯の交換や水の給排水のトラブル、窓ガラスの破損、なんでもこなした。小さな電気器具の修理も覚ええた。

保健所の運転手の仕事は暇で仕方がなかったが、何かが流行するとパンク寸前になった。それも過ぎてしまえば忘れた。

車の整備を覚えたのはありがたかった。

市営火葬場勤務は長かった。喪服に身を包んだ寡黙なＴには似合った。棺桶が炉に入れられる寸前の儀式、骨を拾う儀式、それらを彼は慇懃無礼にもつたいぶつて説明した。丁寧な応対は家族を慰めた。近代式設備のため、煙も匂いも外には出なかった。だが彼は微かな甘い匂いを感じた。それは死臭だったのだろうか。

「四 白い花」

三つ目か四つ目の職場の公園課に異動したときも下請け会社だった。市役所職員としても十数年経っていた。その「若葉緑地公園公社」は市から丸投げされた仕事をこなすだけだったが忙しかった。それは初めて気づいた気持ちのいい仕事だった。ただ三年ほどでそれは終わった。そして深い傷を残した。傷は彼にとつては人生で初めてで、おそらく最後であっただろう。

市の外れの丘陵地帯は昔はゴミ捨て場であったが、近年はそれらを除去し丘を切り開いて新興の住宅地として発展しつつあった。それでも手入れされていない大きな池や、昔からの雑木林とか竹林が残っていた。見慣れない鳥が季節ごとに変わった。

数年のうちには増えていく人口に合わせて小学校や中学校ができる予定になっていた。

テニスコートが二面、野球場、芝生の多目的広場、ジョギングコースができ、桜の苗木が植えられ四季折々の公園の花がそれらを飾った。「若葉緑地公園公社」は議員や役人の間の裏金流れに通じており、一儲けの後にまた下請けの公園の管理事務所を作った。

近くの小さないくつかの公園も含めて管理する仕事はＴには嬉しい仕事だった。毎朝の仕事はいくつもの公園のゴミ拾いと、トイレの掃除だった。週末は野球やテニスの申し込みが多く翌日は忙しかったが、平日は年寄りの散歩くらいで、たいした苦勞もなかった。ただその二、三時間ほどの毎朝の仕事が彼の体を鍛え健康にした。

事務所には他におとなしい年寄りの作業員が二人と女性事務員と自分を所長と呼ばせている小太りの無粋な男がいた。機嫌が良くても悪くてもいつも怒鳴り散らしていたが、反応の薄いＴに対しては途中で諦めるのだった。隣の部屋は倉庫でスコップや剪定鋏や標識などが詰めこまれ、奥には緊急時の養護室があった。暖房はストーブだったが、冷房装置は設置されていた

所長は毎朝職員を並ばせてラジオ体操をさせた。Ｔは心地よい朝の汗は嫌いではなかった。そのあと所長はテニスコートや野球場の予約をノートに書くだけで大した仕事はしなかった。胃潰瘍と糖尿病を患っているということだったが、昼間から酒の匂いをあたりにまき散らしていた。お茶ばかり飲んでいたがあれは酒だったのだろうか。暇な時は机にうつ伏

せて寝ていた。再雇用だが、会社の裏仕事の金の流れを知っているとかで、本社の上司もその傍若無人ぶりを黙って見ていた。

初夏と秋の雑草刈り、芝生の養生、雑木の剪定は大掛かりだったので外からの応援があった。また例えば萩が盛りを過ぎると枝を切り込むのだが、それらの小さな仕事くらいが作業員たちの仕事だった。

冬が明けると、ジョギングコースに等間隔に植えられた辛夷の花が咲いた。枝いっぱい咲いた純白の花びらは空に向かって開き、小鳥になってすぐにも飛び立っていこうとしているようだった。Tの心は踊った。

花が散ってしまうと次はもう桜の日々だった。

公園中が薄紅色に包まれ、花びらはジョギングや散歩する人の頭上に降った。そこに立つと頭がボンヤリして色のついた柔らかな雲に包まれているような至福を味わった。その後、はふくよかな八重桜が大きな塊をぶら下げて春の陽光に揺れた。

白い椿の花弁は落ちるとすぐに黄色に汚れて萎んだ。

公園の近くの潇洒な民家の塀を白い野薔薇が飾った。

白い紫陽花の塊は冷たい雨の中でも控えめに輝いたが、それはすぐに躑躅の力強い白色の群れに押された。

芳香を放つ可憐な私たちの小さな花卉の根元の棘に刺されても痛みは快感になった。

雨上がりの梔子の垣根には甘い匂いが地面から沸き起こっ

た。鼻を近づけて匂いを嗅ごうとすると無数の蟻が移つてきて顔を這った。それが萎れるとニセアカシアの白い花卉が甘い雪のように頭上に降って来た。甘い匂いには不吉な感じがした。

夏の青空には大きな夾竹桃の花が毒々しい白い炎のように吹き上がった。白い木槿の花は雪のように枝いっぱい溢れて夏の陽を浴びた。日差しが落ち着いてくると、乱れた白萩が遊歩道を覆った。

朝の涼しい風を受けて揺れる白い大輪の醉芙蓉は夕方には疲れ果てて薄紅に萎んだ。

木々の白い花は時期が終わるとどれも汚い黄色に萎んで地面に散った。毎日それを掃き出さねばならなかったが、Tはそれが自然のまま風に吹かれて飛んでいったり雨に濡れて地面にこびりついたりするのも嫌いではなかった。ただ所長がそれを許さなかったのでTは不満ながら従った。

梨や林檎や蜜柑の白い花の咲き誇る果樹園の写真や絵は何度も見て感動もしたがまだ実際には知らない。いつかその中に立っている自分を思うと嬉しかった。

Tは名前を知らなくても、白い花ばかりが目についた。雑木林の中でひっそり咲いている白い花はなぜか懐かしかった。一つ一つ名前を調べようという気はなかった。それは自分の胸の許容を越えていた。

とくに愛したのは白い草花だった。ノース・ポールという三センチほどの小さな菊は種を蒔いておけば可憐な塊になっ

ていつの間にか咲いていた。雑草のクローバーの絨毯には無数の白い寶石が散らばっていた。夏草の繁みの中では自然に白い百合が頭をもたげていた。

滅多に本を手にするのではないのに、たまたま手に取ったのが絵画の本でその中で見た不思議な花の絵が忘れられない。チューリップのような白い花が一本立っていて両側に葉が伸びている。ただそれだけなのに、奇妙に艶めかしくその孤立した様が内部に秘めた不気味な怖さを表しているようだった。何故か怖くてすぐに頁を閉じた。作者は、ヒットラーという人物だが、誰なのかTは知らなかった。彼はすぐに忘れようとして忘れた。ただ、妙な気味悪さは残ったままだった。

花壇の土を養生してチューリップの球根を植える時期には応援が来た。この秋の土いじりの数日は嬉しい日々だった。煉瓦で囲った小さな花壇が二十個ほど遊歩道を囲んで、その中で花はお洒落な少女のように可愛らしく揺れた。チューリップはこの公園の名物の一つだった。

彼が一番好きだったのは水仙だった。異動で最初に来た時は、春であつたから、白い花だけでなく色とりどりの花々が公園を包んでいたの、草花まで眼はいかなかった。そばを通つてふとその香りをかいだ時ほどの花かわからなかった。小さな群れを作つて公園のあちこちに佇んでいたが目立たなかった。しかし意識しないままその花は胸の奥に沈んで、薄

闇の中の白い可憐なそして強い存在になつていったのだった。ある夜の夢でそれははつきりした。女性に口付けしようとする

するとその唇は水仙の花の黄色い芯になつた。乳房を吸おうとすると水仙の匂いがよぎつた。純潔の白い花弁に包まれた黄色は恥部のようだった。その矛盾はエロスの渦となつて彼の胸を搔きむしつた。

春も終わると水仙は力を失くし萎れ始める。その姿が哀れで、数日前まで咲き誇つた可憐さが強力に蘇り、さらに愛おしくなつた。少女がいきなり老婆になつた気がしたが、郷愁を誘う匂いは悲しくもあつた。

翌年のために作業員から水仙の育て方を習つた。花がしばらくでしまつた茎は切る。しばらくして変色した葉は切る。そして球根をいくつか掘り出して、新しい場所に群れを作るために保存をする。来年の花のためには秋になつてから植える。冬の終わりに新しい葉が伸びて、小さな花が顔を覗かせるのを待つ日々はどんなに楽しいだろう。

老作業員の一人がこつそり教えてくれた言葉がさらに水仙への興味と愛おしさを覚えさせた。

「水仙には毒があるのだよ、人が死ぬことも。殺すこともできる」

「五 小美」

ある春の終わりの頃、水仙がもうその新鮮さを失いかけたころだった、市の職員が一人の女性を連れて来た。彼女はま

だ少女のようだったが十八歳ということだった。中国人だが日本語は下手でも少しは話せる。職員の紹介を聞きながら、彼は彼女がそう魅力的でないのに安心した。ただ細い眼は涼しい。背は高くはなかったが脚は長く伸びていた。顔は小さく眼を離すとその特徴をすぐに思い出せそうにないくらいだった。中国人というだけで、少しTの胸が引き締まったが、印象の薄い女性だった。そしてまだ十八歳なら自分とは十五歳以上は離れている。興味のある娘に過ぎないと思うと落ちていた。

名前はよく聞き取れなかったが、小美、シャオメイ、と呼んでくださいと彼女が言った。

初日ということで緊張していたのだろうか。女子高校生の制服のような灰色の堅苦しい服を着ていた。布の靴は古かった。

その頃は、中国残留孤児の帰還問題が大きなニュースになる前だった。ただ先駆けで、県が独自に一組の県人を見つけて早めに試験的に呼び戻していた。終戦間際に二十歳だった母は中国人男性と結婚してそのまま住んでいた。かなり時間が経って娘が生まれ、今回は母娘が帰って来たのだった。父は中国に残ったままで、母娘もどこに永住するかまだ決めていなかった。日本が良ければその中国人の父も日本に住む予定らしかった。

二人は市営住宅に住み、仕事もしなければならなかった。短期間の臨時仕事ということで市は小美を公園課に配属した。

公園の花の手入れは言葉の壁もなく軽い仕事のはずだった。

所長は中国人蔑視の言葉を口ごもりながら、Tと一緒に仕事を指示した。そして、もっとリラックスして来い、と言った。そのリラックス、という言葉は彼女には聞き取れなかったようだ。Tはすぐに、中国人にとっては、日本語に外来語や英語を混ぜると聞き取りにくいということがわかった。

彼女は翌日からは、古いジャンパーとズボンに着替えて出て来た。Tの服装に合わせたのか他にないのかはわからない。

Tは彼女がゴミ拾いやトイレ掃除を嫌がらないのに安心した。その動きは明るく気持ちよかった。ゴミ拾いやトイレ掃除は嫌ではないかと聞くと、あっさりと言事が帰って来た。中国のトイレは掃除ができないほど穢い、日本のはきれいで驚いた。中国の公園はこんなものではない、もっと大きい、数倍あるなどと、日々の明るい声がTを喜ばせた。草原で人気がないときなどは、寝転んだり足を揚げて踊りの真似をすることさえあった。

その年の夏は晴れた日が多かった。二人は麦わら帽子をかぶり、濡らしたタオルを首に巻いて仕事をした。小美は薄いシャツを着て腕の日焼けを避けていたが、そう気にしているようでもなかった。Tは肩や額や胸や腕が日焼けするのを喜んだ。こんな気持ちは初めてだった。

暑い日でも木陰に入ると、涼風が吹き抜ける。汗が笑顔から弾ける。小美の汗の匂いがTの喉を締め付けそうになる。ああ気持ちがいいわと、いう小美の白い歯が光る。

時には夕立が来そうになると、二人はそれを待った。そして土砂降りの雨の中で笑いあつた。濡れた服の上から小美の胸当てや肌が見えた。事務所では隠れて体を拭いた。所長が苦い顔をしていたが、気にはならなくなつた。湿気が夕方まで続き、雨が来ない時は水撒きの水道をふざけてかけあつた。夏の夕時は何時までも明るい。定時前に所長は帰り、作業員も帰ってしまうと二人は冷房装置をつけて残つた。Tは日本語を小美は中国語を互いに教えあつた。Tの下手な四声の発音や無気音や有気音などで笑いあつた。

友達の間で流行つていっているという、毛沢東の悪口や物真似でまた笑い合つた。Tが怪奇物語で学んだ近代中国の歴史の知識は小美を驚かせた。周恩来が年の初めに、毛沢東がその秋に相次いで亡くなつた。政変も起こつた。

Tは中国語の勉強を始めた。そして彼女が昆明で生まれ住んでいたと聞いた時は驚いた。父の最後の姿が見られたのは昆明だつた。戦争とはいえ多くの中国人を殺した日本兵にどんな感情を持つているか考えることは恐ろしかった。小美の母が日本人であるとは救いだつた。Tは父親のことを小美には言わなかつた。

そして初めて中国大陸の地図を見て昆明を探した。昆明のある雲南省はビルマやタイの国境に接し小さな見慣れぬ名前の町が点在している。海拔二千メートル、どんな山や峡谷や森があるのだろうか。少数民族と言われるどんな人達が住んでいるのか。

Tは終戦時の昆明の日本兵の手記や記録を探して読んだ。拉孟の戦いは壮絶なものだつたようだ。誰の援助もなく戦い抜いた数千人の日本兵が全滅した。知らないことばかりで恥ずかしかつた。今までその言葉の響きに怖れと懐かしさを感じて、決して見ようとはしなかつたのだ。惨劇の傷跡が残る村を放浪する父の疲れ果てた僧侶の姿や、あるいは野望を抱いて駆け抜ける精悍な青年の姿が想像されて、懐かしさだけがあつた。ただ地図に拉孟という町が見つからないのが不思議だつた。

私が住んでいた昆明の光華街は古いけれど綺麗な家や店が沢山あつて、みんな涼しい夕方なんて、そろそろ散歩するの、買わなくてもお店を見て回るだけでもとても楽しいところなの。公園の茶店でみんなでプーアル茶を飲んだりするととてもおいしい。この頃はあまりきれいでないところは壊されて、大きなビルができてたりしている。小美の言葉の響きは何時までも消えない。

立秋もだいぶ過ぎたある日の午後、公園を見回っている二人の眼の前を秋の蝶が通り過ぎた。いかにも弱々しい。小美がそれを追つかけて草むらに入つた途端、叫びを上げて飛び上がり道路へ転がって倒れた。その足首に紐のようなものがくねっている。螻だど気が付いてTはスコップでその胴体を断ち、頭を掴むと一度押し付けてから牙を引き抜き遠くへ投げた。そして膝関節の下をタオルで巻いて強く縛つてからそ

の傷口を力いっぱい吸った。冷静にならねばならないとすればかりを考えた。血はあまり出なかつたが吸い続け、そして唾と一緒に吐いた。

小美は最初はパニック状態だつたが怖れと驚きで放心したようだ。抱きかかえて声をかけてもはつきり答えない。Tは全力で走った。

養護室の布団に寝かせ傷口を消毒すると少しは落ち着いた。その間もTは血を吸った。所長は酒から覚めたように怒鳴り声で救急車を呼んだが、車はなかなか来なかつた。近くの救急病院には蝮の血清が常備されているはずだつた。

小美は三日間入院した。血清の後の点滴で体調は戻つた。Tも一応ということで点滴を打つたが、その夜じゆう熱と悪寒で苦しんだ。奇怪な面相の数人と毛沢東が渦の流れの中で権力闘争をしていた。その渦が激しく回つて空中に舞い上がつて霧散してから目が覚めた。

彼女はしばらく出てこなかつた。自宅に見舞いに行こうかと思つたが住所は知らない。市に聞けばわかるかもしれないが、その勇気はなかつた。所長の叱責は素直に聞いた。事故は自分の責任だと思われた。

楽しみにしていたチューリップの球根の植え付けの時期にも彼女は出てこなかつた。球根ごとに色を想像して植えて、どちらが当たつたかを春になって語り合う笑顔の嬉しい夢はいつの間にか消えた。

やつと水仙の球根の植え付けに彼女が出て来た時は嬉しいか

つたが、いつもの元気はなかつた。草むらに近寄つたり土をいじることが厭な様子だつた。僕は水仙が一番好きだと言つて、離れて立つている小美に球根を植えているところを見せると、やつと微笑んだ。その弱々しい微笑をTはすがりつくように心に秘めた。

小美は時々出てきてはすぐに歸つた。お礼にと持つてきたクッキーのような中国のお菓子をTは何時までも食わずに置いていた。

秋の公園の作業は忙しかつた。Tはだれとも口を利かず黙々と働いた。気になることを考えなければいいのだ。考えなくて済むように疲れ果てるまで働くのだ。全身を疲労が打倒すまで、気を失うほど眠るまで働くのだ。黄色や赤に染まつた木々の間を抜ける秋の風が彼の身体を触れていくとき、疲労は少し和らぐのだつたがそれはすぐに哀しみに変わった。そして冬が来た。

休みの前日、お正月にどうぞとTは小美に自宅へ招待された。Tは嬉しさよりも不安だつた。

小美の母は六十歳前後だろうか、十八歳の娘の母にしては少し歳がいつている。しかし想像していた朴訥な様はなかつた。化粧をして盛装すれば多分美人と言われるだろう。遠慮がちなTにかまわず手慣れた応対だつた。何故終戦まで中国にいて、そして今までどんな生活をしていたのか興味があつたが、聞けるものでもなかつた。父の事を話したかつたがそ

それは抑えた。

市内でも一番古い市営住宅で、台所のほかは部屋も六畳と四畳の二間だけ。一応風呂がついているからいい部屋だろう。自分一人と思っていたが、ほかに客が二人いたのに少し落胆した。若い男女で、ポランティアで母娘の世話をしているという。一人が名刺をくれた。ある新聞社の下請けの印刷会社の労働組合員ですと言ってその日の赤旗をくれた。小美と中国語で冗談を言っているのか、声をあげて笑ったりしていた。

ハムとジャガイモの炒めもの、茸と鶏のスープ、中国餅や麵。一番美味しかったのは、一晩中、生姜と一緒に甘く煮込んだという豚足だった。Tは出された料理だけでなく紹興酒も煽った。

食事が終わると、小美が狭い部屋で歌って踊った。来日のために作ってきたという緑の支那服は金色で縁取られている。左胸の下に小さな白い花の刺繍がある。水仙にしか見えない。胡弓の音に合わせて透き通った声でゆっくり歌う。

黒色的眼睛 少女的眼睛 鴉色頭髮 明瞭眼睛

可憐な少女の黒い瞳よ 鴉色の黒い髪 けなげな瞳よ

ただ俺は、もっと強い酒が欲しい。可愛らしい素足は白い。それに口をつけて俺はあの時力いっぱい吸ったのだ。あの時

の血が甘く蘇る。

かなり酔ってからTは早めに辞した。外は曇が降っていた。小美の一つ一つの動作や表情が、眼底から離れなくなる。甘い暖かな氷のようなものが喉から胸に差し込んでくる。それを追い払おうとする。酔いが蘇ってこめかみが疼く。もっと激痛が欲しい。眼底から喉元へ落ちるものはもう甘くはない。なにか分からないが苦い。それを吐き出そうと咳込むと胸腔が引きつって痛い。

小美と会ったのはそれが最後だった。

正月休みに母が亡くなった。寒い部屋で一人で冷たくなっていた。クモ膜下出血で倒れたままだった。葬式や家の整理で何日もかかった。遺品整理は姉に任せた。装飾品や着物や遺影は姉が持っていた。Tは欲しいものは何もなかった。母の同居人の短歌結社の主催者は、本や資料をたくさん置いているので部屋を引き続き貸してくれといった。断つたが執拗に頼んでくるので、ある日Tはすべてを箱に詰めて玄関先に出し鍵を閉めた。Tは自分が頑固で他人にも強く当たれることが分かって驚いた。

家はいくらでもよかったですすぐに売れた。

久しぶりに公園事務所へ出ても、小美の姿はなかった。課員と顔を合わせても何か空々しいが、Tは疎外感を気にしなかった。寒風にさらされて二時間もゴミ拾いで公園を回る。ゴムの手袋をしていても一人でする掃除の水道水は冷たい。

雪の積もる草原ですることもない。考える必要のない体の動きに身を縛るのは心地よい。納得する規範に身を投じることを求めるべきだ。ただ黙々と仕事に従事すべきだ。

それでも心の底に落ちた水滴がふと蒸発するように感じた時、それを抑えようと思えばできたのに、あえてそれに身を任せる気になった。

鈍感になるべきだと決心して小美の部屋を訪ねたのだった。ドアを半開きにして母親が、小美はいない、と言つてすぐに閉じた。Tは何も詮索しないと決めた。

そして十日ほど経つた時、また訪れた。同じように母親がドアを半開きにして、小美は中国へ歸つた、と言つて冷たくドアを閉めた。Tは一瞬、暗い穴に落ちて行こうとする感覚を味わつたが、すぐに現実を取り戻した。そしてなぜか解放されたと思つた。

渴いた寒風が吹き荒んでいた。小美の踊りを思い出しながら歩いたこの前の囊の方がよかつた。風が錆びた刃物になつて胸を切り刻むようだった。鼻水を流れつばなしにして歩いた。

小美に恋をしなくてよかつた、彼女を愛さなくてよかつた。白い足首をもう一度吸いたい、そして胸を愛撫したい、その唇を、など、妄想に憑りつかれて苦しまなくてよかつた。すぐに消えて行く夢を見ただけかもしれない。ふと訪れた単なる春風だったのだ。

「六 定年」

役所勤めは半分が過ぎていた。そのあと五年ごとに異動になつて、二十五年が経つた。定年を迎える半年前には長期休暇を取つた。

二十世紀末を迎え世界滅亡のハルマゲドンの噂が巷に流れたりしていた。彼は秘かに楽しんだが何も起こらなかつた。代わりに、オウム真理教が狂気のテロを行い、阪神大震災がおこつた。

異動するたびにそれなりの歳になつていったので、職位は少し上がった。決まつたことをするだけなので苦勞はなかつた。退屈であつたが時間を潰すのも仕事のひとつだつた。部下に指示し間違いを指摘し、上司からの理不尽な指示にも従つていたが、ある時からふと無視するようになった。上司からも部下からも当然信頼はなかつた。日々を送るには都合がよかつた。

最後の仕事だけは、世の中の役に立つたようだ。火山噴火と地震で打撃を受けた東南アジアの国の手助けをしたことがあつた。

その時彼は昔の所属の環境課の衛生係長だつた。だんだん使用頻度が少なくなつていたバキユームカーを十台、その国に送つた。混乱した都市の衛生状態は壊滅的だつた。バキユームカーは役に立ち、大使館から感謝状が贈られた。ただ彼はその提案書と決裁書に押印しただけだつたが。

四十二年間を振り返つてみても何の感慨も起こらなかった。嫌な事もちよつとした喜びも思い出せなかつた。思い出すいくつかの職場の記憶は混ざつたままで、仕事も忘れてしまった。頭髪も薄くなり毎朝整えずに済み、ワイシャツは数日着たままでも汚れは目立たなくなつた。酒の量は増え強くなつた。睡眠は十分にとれた。

ただ一つの事実が心の奥底に釘のように突き刺さつたままだつた。彼は独特の体質でそれを記憶の外に追いやつて、蘇ることを拒否することができていた。しかし定年を迎え、すべての仕事の記憶が消え去ろうとすると、それだけが残つたままになつてゐるのに気づいた。

俺は間違ひなく、あの男を殺した。勘違いで単なる事故であつたかもしれないが、確実にそれは俺のしたことだ、と思ひ込むことだけが自分の存在価値のようにも思へた。自信に満ちた誇りある自分がそこにいた。その誇りを誰かに告白したいという気持ちもあつたが、やはりその記憶からは逃げ出したくもあり、結局は小さな大切なものとして心の奥底に残すことにした。

秘かに恋をした、そう思いたくはなかつたが、今はその気持ちを取らない、中国娘小美との数か月のことだつた。

定年退職する事務の女性がある日Tを呼んでこつそり話してくれた。事故の後、所長が責任を感じたのか、入院している小美を見舞つた。その際少しだけ見舞いでお金を渡した。

小美はそれなりに喜んだ。翌日は小美の母親も来ていたので、所長は気前良く見せるためにまた見舞いを出した。その額は少し大きかつた。

小美は仕事に復帰しても、蝮の怖さの後遺症で元気がなかつたが、所長への感謝でいつもより親しさを込めて接した。所長も彼女を優しくいたわつたが、その眼付がだんだん厭らしくなつていった。

年が明けて正月酒の覚めないある日、所長はついこらえきれずに小美の身体に手を触れた。事務所には誰もいなかった。養護室に連れ込まれた後はどうなつたかわからない。酔つ払い相手から逃げ出すことは女性でも若い力はあるはずだ。それ以上の事はあるはずがない。

自分は必死で逃げた、全部は話したくない、誰も信じないだろうし、また証拠はないので誰に言いつける事もできない、小美が事務員に泣きながら途切れ途切れに語つたと言う。翌日から小美は来なくなつた。

Tの全身から力が抜けた。怒りはその後こみあげてくるはずだつた。だが彼が覚えたのは、怒りから眼を背けて高ぶりを抑えようとする別の力だつた。彼は自然にそれに身を浸らせた。せめて体が傷つかなかつたのが救いだ、そうであるはずだと思ひ込んだ。所長の顔や姿はTの視界から意識からも消えた。

もう遠い国に帰つた小美と会うことはないだろう。忘れる事だ。俺には傷ついた哀しい心の小美への愛おしさが残るだ

けでいい。なるべくそれを小さくして秘めて持っておきたい。

その冬は寒い日々が続いた。二時間のゴミ拾いとトイレ掃除は冷えた体を温めてくれた。彼はさらなる冷気が欲しかった。耐えられないくらい、体を打倒すほどの極寒が欲しかった。しかし何も感じずに日々は流れ、冬は終わった。

他に先駆けて水仙が咲いた。風に揺れて可愛い顔を向けてきても、Tは何も感じなかった。毎日少しずつ水仙の葉もぎ取って来ては、小さく刻んだ。それが日課の終わりだった。朝、所長が一杯のお茶を飲むと、その急須に水仙の刻んだ葉を入れた。糖尿病の所長は一日に何杯もお茶を飲んだ。Tは毎日少しずつそれを続けた。何日間だったか数えていないし記憶にもない。頭の芯がぼんやりしていたのだけは覚えてる。復讐などと大げさなものではない。Tは冷静だった。淡々と続けるだけだった。

ある日所長が大量の血を吐いて倒れた、と連絡があった。長年患っていた胃潰瘍が破れたということだった。その数日後に訃報も届いた。

市役所の仕事には従順であるべきだった。何年を過ごしたかに意味はなかった。何かをしたことにも価値はないし、記憶にない。そしてTは定年を迎えた。

第二章 男Tの非現実

「一 出発」

二〇〇X年の事だった。

薬学部の教授をしていた義兄も定年を迎えていた。あとはある製薬会社の顧問になると言うことだった。ただししばらくはゆっくり休暇を楽しみたいとも言っていた。

そんな時、高さんから手紙が来た。昔、義兄の研究室に入りし、様々な薬草を持ち込み、抗癌剤の実験をしていた青年だった。Tに白花蛇舌草の花の魅力を教え、白い花の幻想に捉われるきっかけをくれた青年だった。高さんの性格の良さから、義兄は私生活でも面倒をみることを厭わなかった。当然Tとも親しかった。

彼はある時、義兄の大学を去り、アメリカに渡った。しばらくして義兄は高さんの論文がアメリカで評価されているのを目にした。日本以外でも一般的に使われている白花蛇舌草の種類で、白花龍舌草というまだ知られていない薬草に関する内容だった。免疫療法と併用するとそれはさらに有効な抗癌的作用がある。かつての研究室の仕事を踏襲しているだけだったが、義兄は祝福の手紙を送っていた。

彼は中国に戻って、雲南省の昆明医学院の教授になっていた。恩師義兄の定年を知り、旅行気分一度大学に来て講演でもしてもらえないか、という招待だった。姉夫婦は承諾し、

Tも喜んで同行することにした。

Tはそれまで姉と終戦後に昆明で行方不明になった父について話し合うことはなかった。ただ姉が昔、高さんが自宅に来る度に少しづつ雲南省昆明のことを聞いたりして、調べたりしている事は知っていた。丁度いい機会だと言うことで二人は知っていることのすり合わせをした。

拉孟の日本軍の全滅の前に脱走した十数名は、雲南省の西南の方角は避けた。そこはビルマへの道だったから危険だった。彼らは南東を目指した。父もその方面を辿ったと思われる。タイの北部との国境の高原だった。いくつかの少数民族がそれぞれの地域に住んでいた。日本人のルーツといわれるハニ族もその一つだった。

何度かの手紙のやり取りと、高さんの下調べで日程が決まった。

昆明巫家八空港からローカル線で四十分くらいのところと思茅と言う小さな空港がある。そこは上質の温泉地区で、プーアル茶や薬草の宝庫でもある。その漢方薬と温泉の組み合わせは抗癌剤のさらなる効用に優れている、と全国からの客は絶えないということだった。また、昆明の南に位置し少数民族の地域の入口でもあり、日本人の脱走兵の隠れ家との噂も多い。

そこで車を借りて、温泉を巡ったり、薬草を探したりして三日ほど過ごし、昆明に戻り講演と観光をしようということになった。白花蛇舌草の群生と、まだ見たことのない白花龍

舌草があるということでもある。

また六十年も経っているが日本人脱走兵の話を知る老中国人もいるとのことだった。まさかそこに父が生きているなどと言うことはありえないだろうが、こうやって話していると六十年というのは短く感じられる。

度々昆明という町が具体的に語られると、小美や光華街という言葉が、センチメンタルな思い出で蘇ってきたが、Tはそのことは口にしなかった。もう二十五年は経っている。そこで小美とばったり会うことはないだろうが、もしあったとしても自分は明るい顔で会えるだろう、いやどうだろう、と想像しながらTには余裕があるつもりだった。

だが気が付くと、胸が小美への愛おしい痛みに一杯になっていた。絞り出されるような眼底の涙は甘い唾液になつて喉にこみあげてきた。

昆明市五华区光華街七一四号、いつか小美が教えてくれた住所が浮かんでくる。何度も写真で見た中国の家並み、そこに間違いなく彼女は住んでいる。いつの間にかそれは確信に変わった。そして今は四十三歳だ。彼女は結婚はしていない。中年らしく胸と腰回りは少し太って艶めかしいだろう。頬も首筋も唇も豊かな肉付きだ。耳に白い花の小さなイヤリングが揺れている。誰も今は、小美とは呼ばない、おばさんだろうか、それなら美大姉、メイダージエだ。

街の片隅で花屋をやっている。店の裏には小さな庭があり、夏の涼しい夕方、縁台に座って団扇であおぎながら風に揺れ

庭木を見ている。地面をじつと見つめている眼は動かない。若葉緑地公園と俺の事を思い出しながらだ。

俺はそこに住むだろう。何の意味も価値もない、未練もない今までの人生を捨てる。小美と日々を送る。俺は小美の白い柔らかい足を、今はちよつと太つた足を、あの時のように吸う、毎晩だ。そしてふざけ合う、夏の暑い日に水を掛け合つたように、夕立ちの日のように。

飛行機に乗るのは初めてだった。空港の人の群れ、外国語の場内アナウンス、珍しいものばかりだ。飛行上昇で眼下に消えて行く街並み、その中に降り立っていく不思議。山や海を大空から眺める。

Tは何度も飛行機を乗り換えるたびに体に自信と力が湧いてくるのを意識した。居眠りをする暇はなかった。食事はどれも美味しかった。見慣れない黒人や白人や東洋人が香水の混じつた体臭を振り撒きながら傍を通り抜けていく。税関と対応している時、Tはふと役所に勤めていた時を思い出した。何も考えずひっそり生きてきた。なんという変わりようだろう。Tは目の前の新しい世界にすぐに溶け込んだ。

北京空港で乗り換えて昆明巫家八空港から次に着いた思茅空港は小さく古かった。戦時中の軍用機の滑走路をそのまま空港にしたそうだ。燻した葉草のような匂いが大蒜の匂いにまぎって漂っている。粗末な背広のタクシーの運転手が数名客を待っている。帽子のような髪飾りをつけた女性が原色の

布を纏い立っているのは少数民族の宣伝だろうか。大声で喋りながら通り過ぎる得体のしれない中国人たち。

高さんが迎えに来ていた。すこしも歳をとつていなかった。相変わらず優しい細い眼と坊主頭。大学教授には見えない。久しぶりの挨拶は次々と昔話に変わつてとめどなかった。

まずちよつと離れたところにいい温泉宿を予約しています。その先の集落に九十歳の老人がいて、昔の日本の逃亡者たちの事をよく知っています。今日はそこまで行つて戻りましょう。頑丈な大型の貨物ワゴンだった。三日間走つても十分なガソリンと水は用意していますから、明日から秘境の葉草の群生を案内します、と高さんは言った。

白い土壁を赤や緑で彩つた瓦屋根の家々の街を通りぬけた。初めての土地、初めての外国だった。通行人は少なく誰もが灰色の服を着て沈んだ顔で歩いている。男は中国帽で女性は素顔で髪を後ろに束ねているだけだ。自転車の荷台に鶏を一杯に押し込んだ籠を積んで走っているのも珍しい。誰も貧しそう。珍しい街をゆつくり味わう時間もなく、短い通りを抜けると舗道は消え田舎道になった。

砂塵を揚げ小石をはね砂漠のような道を走つた。周りは原野が畑か区別がつかないが青々している。険しそうな山並みが遠くに連なっている。近づいたり離れたりする周りの山々に沿つて森へ入る。高さんと三人の話はずんずん眠つた。

ずいぶん時間が経つたようだ。眼が覚めると、三人は黙つてただ前を向いている。かなりのスピードだ。高さんは真剣な顔で運転に熱中し義兄と姉は表情を失くしたただ前方を見ている。小山や岩や木々が飛ぶように流れていく。Tはふとまだ夢を見ているのではないかと思う。

わき道に入り、小さな丘を登ると一軒の土塀に囲まれた農家があった。中庭に瘦せた牛が一頭と数羽の鶏が地面をつついている。牛の糞尿の匂いがきつい。眼のつり上がった二人の少女がしゃがんでこちらを見ている。顔が汚れている。午後の陽も翳り始めた。

案内を乞うと、薄暗い土間の部屋に案内された。暗くて見えないうちか座っている椅子とテーブル以外は何も無い。この長老が昔のことをよく知っているはずだ、と高さんがいってもなかなか本人は出てこなかった。

帰りの道は分かっているのに、来る時よりも時間はかからないだろうが、そろそろ引き上げねばならないとみんな焦りだした。しかしここまで来たのもう少し待とうということになった。

老人を待つていた甲斐はあった。噂の通りに九十歳を越えている。終戦時、老人は兵隊でなかったので、逃げて来た日本兵たちが哀れなのでかくまってやったということだった。食事と水を与え、安全な方向を教えた。二人や三人でばらばらで逃げて来た。随分後になって一人で逃げて来た者もいた。お礼にいつか恩返しをすることもあるだろう、と一人が言っ

て古紙に名前を書いた。すると何人もが書いた。書かないものもいた。全部で十九名だった、名前があるのは十三名。

古い紙で字もかすんでいた。中には達筆で出身県名を書いたものもある。Tは目を凝らして父の名前を探したがなかった。落胆するような安堵するような妙な気持ちだった。姉もそうに違いなかった。

老婆が蒸かしたての万頭とブール茶を出して来た。断るわけにはいかなかった。冷たい万頭とバナナに似た果物を分けてもらつてお金を渡しやつと外へ出た。

この先の黒い森と言われている森を抜けると溪流が流れていて、薬草の宝庫ともいわれている谷間がある。まだあまり知られていない秘境だ。生まれ変わつて新しい世界へ行くぞ、と言つて日本人たちはそこへ向かった。老人は別れ際に言つた。日は暮れていた。

今から宿に戻つて、トンボ帰りで明日またここに来て先へ行くのも時間が無駄だ。ここでしばらく休んで、明るくなつたら先へ進もう、と高さんの話に納得しなければならなかった。

全く安心するわけにはいれないがそう危険でもないだろう。目立たぬところで時間を潰せばいい。いや、なるべく長い大きな通りに車を停めて、何か危険を感じたらすぐ発車できるようにした方がいいということで、交代で起きることにした。姉は賛成だった。

「二 非在への入口」

ここまでがTの確實に残っている現世の記憶だった。周りの現実の意識はあつたが、現実がするりと裏側に捲られてその奇妙な空間にいる事だけは分かった。異次元の意識は不思議な気持ちだったが何の抵抗も実感もなかった。ただ薄っぺらな紙のような意識しかなかった。

車内に流れ込んでくる風のおまりの気持ちよさに、Tは外に出た。頭上の遠い上空は丸い大きな世界で、隅々まで砂漠の砂をまき散らしたような星に埋められている。暗青色の闇のはるか先まで大小の輝きに満ちている。振動する大きな星や消えそうな星をちりばめた天空に、帯のように流れ動いているのは初めて見るが天の川だろうか。大きな星が急に瞬いて目の前に下りて来る。手で掴めそうさ。時折、星の一つが溶けるように青色の光を一瞬放つて消える。鋭く流れて消えるのもある。頭蓋骨の中を清涼な風が吹き抜け、脳漿をかき混ぜ捨て去った。星々はさらなる闇の奥底へ消えて行くことしながらも、また地上に落ちてきそうになりながら、動かない。そしてこれほど身近に星々を感じられるのに穹窿ははるかに遠い。

頭の芯が痺れて痒いような痛いような塊になって凝縮していった。Tは大きく手を広げて振ってみて体が生きて存在しているのを確かめた。確かに存在はしている安心感があつたが、その実感はなかった。

しばらく眠っていたのか、気を失っていたのかは分からない。前方の山の頂上が真っ赤に燃えていた。それは鋭い光になつて辺りの雲に突き刺さる様だったが、次第に弱まると空は透き通った水色に変わっていった。紺碧の空が広がっていた。

車は黒い森へ入っていった。名前の通りに辺りはすぐに黒くなつた。生い茂つた葉室が空の光を遮っているのか、森の木々自体が黒いのか分からない。道は少し登坂のようだった。つぎの村を訪ね、葉草を採取して戻れば今日中にホテルに帰りつくだろう、と高さんは言った。

ところが何時間走つても森は尽きなかった。道は細くなり、両側は絶壁のような気がするほど暗くて見えない。木々は車が進むにしたがつて大きくなつたり奇妙な形になつたりする。何処まで行けばいいのかわからない。道の奥の仄かな明かりが頼りだった。

高さんは黙つて前を見つめ運転している。かなりのスピードだ。姉と義兄も放心したように前を見つめたままだ。Tは長い時間眠つた。森の木々の甘い匂いが張りつめた空気の中に満ちてきた。皆、不安に陥っているわけでもなさそうだが、自分の状況がはつきりわかっているのかどうかさえ分からない。Tは目覚めても何も考えまいとして眼を開けなかった。意識しないまま異次元へのトンネルを通り抜けて行くようだった。一日中走り抜けたかもしれない。ついに時間の感覚は失われた。

やっと見晴らしのいい岩場に出た。思いもかけないほど高くまで登ってきていた。眼下には広い盆地が広がっていた。盆地というにはあまりに広い草原で、低い山々に囲まれていて、ぼんやりとして遠くは見えなかった。午後の光を浴びて広がる無音の膨大な空間。何人も受け入れるのを拒まず整然と位置しながら、誰もが軽々しくそこに足を踏み入れるのに覚悟と遠慮が必要と思われた。

平原のかなり先に集落があり、いくつかの大きな建物が光っている。大自然に囲まれた街か村に違いなかった。午後はもう遅いのに空は青く澄み切っている。

進んで行くのに躊躇はなかった。下り道は急だったが道路状態は良く車は快適に進んだ。それでもかなりの時間がかかった。その村か街に宿泊ができるはずだった。

麓まで降りてくると、空気は穏やかになった。小川が流れ畑が広がっている。岸に様々な花が咲いている。何処にでもある日本の風景に似ている。そう思うことで一行はやっと落ち着いた。

川は畑の先の林の中に続いている。高さんと義兄は何かを議論している。そして二人は車を飛び降りると、ちよつと見てくると言つてなにやら話しながら林の奥へ向かった。珍しい菓草のしるしを見つけたのだろうか。

Tと姉は岸辺に座り足を浸したり、花を摘んで匂いを嗅いだりしていた。甘い香りだった。

どれくらい時間が経つたのだろうか。二人はなかなか戻つて

こなかった。温和な風に包まれてうとうとしていたが、ふと気が付くともう夕方に近く日が翳っていた。少し心配になってきたが何事か起こるはずはないと思ひ込もうとした。二人を探しに行こうかと話し合ったが、ここで待つほうが確実に安全ということになった。

後ろで数人の声が聞こえた時、一瞬Tを襲ったのは驚きと同時に安心感にも似ていた。中国語でもない低い静かな声だった。眼前の出来事を認識はできたが、それを恐怖と感じないほど実感がなかった。未知の世界にいることは分かっていたので素直に受け入れることができた。

「三 愚虜記」

三人の男が立っていた。軍服らしきものを着ている。旧日本軍の二等兵のような格好だ。銃を持っているが下げたままなので安心できた。頭には農民が被るような三角の帽子、いや鉄兜かもしれない、を被っている。彼らが小柄で無表情であるが、細い眼が高さんを思わせたのでTは落ち着いていた。姉は後ろで震えている。

彼らは手招きで二人を自分たちの車に誘導し後ろの座席に乗せた。日本製の古い貨物車だ。Tは同行者がいて先の方へ行つたので待つているのだと、中国語と身振りで伝えた。彼らは無表情のまま分かっていると頷いた。そして二人があち

らの方向に在るからそこへ連れて行くと言つたように思う。彼らは優しかつた。Tは義兄たちが迷子になつてほかの場所待っているのだと思つた。

辺りはもう薄暗くなつていた。高さんの車は兵士の一人が運転し、二人を乗せた車は発進した。義兄たちに会えるのだと思つと安心して、明るい電灯の下で食卓を囲んでいる風景が浮かんできて急に腹が減つてきた。車は暗い草原を走つた。兵士は喋らなかつたが物腰は柔らかに親切だつた。

何時間か走つたように思う。先刻峠から見た村に着いたのかどうかさえ分らない。暗闇の中を走り暗闇の中で車から降ろされ、何かわからない建物に入れられた。暗い中を進んで部屋に案内された。裸電球が一つの床も壁も天井も木造で空気の柔らかな部屋だつた。彼らはすぐに出て行つた。

ベッドが二つとソファとテレビが備わつてゐる。奥にはシヤワーとトイレがある。宿泊施設と思うが、窓には鉄格子だ。外は暗くて何も見えない。試しにドアを開けようとしたが鍵がかかつてゐる。義兄たちがこの部屋に案内されてくるのだと、それを期待するしかなかつた。それ以外の事は怖くて考えられなかつたが、空々しい嘘の芝居を見てゐるようなわざとらしい空気を感ぜるばかりだつた。それでもTは自分の感覚は正常だと感じていた。

夕食を持つてきたのは小柄な男で丸坊主でやはり細い眼をしてゐる。親しみを込めて言葉をかけてみたが無表情で応え

ない。彼を押し倒して外に出ることも考えたが当てのない土地でそれは無理だつた。肉の切れ端が入つたスープと黒パンと見知らぬ果物がついてゐた。腹が減つてゐるのでおいしく食べて少し安心した。

その後も何の物音もしなかつた。心配が増してきたが、心配を真剣に考える方が怖い、眼をそらすのだという考え方がTには身についてゐた。姉は慌てるよりもベッドの横になつて動かない。不安を抱えてそれを抑えようとしてゐるのだから。不安を口に出しても解決にならないのが分かつてゐる。お互いに声はかけなかつた。ドアを叩いて誰かを呼んで状況を説明させるつもりでも、誰も来ないだろう。

夜になつてゐた。明日の朝に何かあるのを期待するしかなかつた。

一日目

吹き込んでくる爽やかな風に目覚めるとすぐに窓の外を見た。見慣れない木が一本と白い高い壁だけだつた。壁の上部に空が少し見えた。

朝食はお粥と三種類の野菜を刻んだ漬物だつた。お粥に混ぜて食べるのだろう。お茶はほんのりと甘く特別に美味しかつた。子供の頃母に連れられて桜の満開のお寺の花祭りでお粥に甘茶が思い出された。お茶は心地よい痺れになつて脳に浸み込んだ。食事がすむと二人は横になつてうとうとしていた。静かだつた。

昼も近い頃、Tは一人だけ呼び出された。天井と壁と床のほか何もない廊下を渡つて部屋に入った。部屋は天井もどこも木で囲まれているので空気が和らいで安心できた。

粗末なスチールの机を挟んで男と向き合つて座つた。坊主頭で丸顔でやはり目が細い。軍服を着ている。印象は日本人を思わせるが、聞いたことのない言葉を発するのが不思議だつた。低い静かな声だつた。

ここに来た経過を尋ねたのだろうと思つて、Tは内ポケットからパスポートを出し名前を名乗つた。高さんのことと義兄のことと葉草のことを中国語を交えて喋つたが、通じたかどうか分からない。男の眼は動きもせず光りもせず何を考へているのか分からない。その無表情の影に何かとてつもない残酷なものも隠されている気もしたが、あえて考へまいとした。義兄たちがどうしているのか掴めないままだつた。何も無い長い時間が過ぎた。パスポートは返されないまま部屋に戻された。

部屋には昼食が用意されていたが疲れていて食欲がなつた。お茶だけを飲んだら少しは落ち着いた。部屋で何があつたかを説明していると今度は姉が連れ出された。長い間戻つてこなかったのでTはベッドでうとうととしていたら夕方になつて、姉が戻つて来た。

明日は何か展開があるだろうと話すのが精一杯だつた。明日義兄と高さんに会えば何かわかる。他のことは考へたくなかつた。

昨日と同じ夕食を取るともうすることはなくなつた。ニュースでもあるかと思ひテレビをつけたが、二人の男が喋りながら笑い転がっている映像ばかりで他にはなにもない。やはり坊主頭で目が細い。しばらく映像を見ていたら電気が消えた。消灯時間なのだろう。

二日目

Tにはまだ現実が見えていなかった。二日目も同じ質問を受け、同じことを繰り返された時、現実の中に恐怖が忍び込んでくる気配を感じなければならなかつた。非現実の恐怖と絶望の予感が確実に姿を現してきた。何の反応も受けずに同じ時間だけを過ごさせられる。何か理由とか説明が欲しい。たとえ納得がいかなくてもだ。それでも明日になれば何か進展があるに違いないと思ひ込もうとした。背中に張り付いた恐怖の芽はちよつと気を緩めるといきなり全身を襲つてきうだつた。

三日目

その日の尋問にTは冷静になれなかつた。焦つてどもり鼻を垂らし時には涙を流して質問に答へた。哀願するような気持ちになつたのは眼前にある恐怖から逃れたいばかりだつた。しかし相手はいつもと同じだつた。夕方戻つてきた姉は完全に生気を失つていた。Tは明日は強く抗議をしようと思つた最後の力を振り絞つて考へた。

四日目

前日と同じ男かどうかも分からない。同じ質問をしてきたが、Tは日本語でまくし立てた。我々はただの旅行者だ。何の権利があつて我々を拘束するのか。すぐにほかの二人に会わせてくれ、そしてすぐにここを出してくれ。決して不審者ではない。昆明の日本領事館へ連絡してくれ。それだけを二回ほど喋ると疲れて涙が出てきて三回目はもう言葉にならなかつた。相手は相変わらず無表情で黙っている。彼を打倒して外へ出るの不可能だ。そしていつもの時間が過ぎると部屋に戻された。

いよいよ真剣に考えねばならなかつた。といつてもできることはない。まさか殺されることはないだろうが、それも確実ではない。このままの状況がずっと続くと発狂するか自爆しかないのであるのか。いつか変化はあるのか。解放される望みを持ち続けるか、じつと諦めてその沈黙へ沈んでいくのか、どちらも同じようだという気もしてきた。姉はすっかり気力を失くし相談もできない。

五日目

Tはそれでも抵抗を始めた。尋問には黙っているだけで応えなかつた。相手は構わず同じ質問をして同じ時間が来ると部屋に戻した。抵抗の意味でTと姉は食事に手を付けなかつた。

た。それでも同じ時間になると別の食事が運ばれた。それにも手を付けず意地でも空腹を通すことに決めた。二人には話すこともすることもなかつた。どうなるだろうと話すことは無駄なことだつた。夜になると白黒の訳の分からないテレビ漫才を消灯まで見た。

X日目

何日か経つてTは負けた。空腹には耐えられなかつた。それよりもまずお茶が飲みたくて我慢ができなかつた。このまま死んでもいいとさえ思っていたが、喉の渴きには耐えられなかつた。水ではなくお茶の事だけを考えたい。義兄も高さんも尋問のことも先のことも考えられなかつた。自分の状況など考えても仕方がない、ただお茶が飲みたい、それだけだつた。ついに出てきた食事を貪り食つた。

毎日の尋問は変わらなかつた。同じ尋問と同じ沈黙の同じ時間を過ごしてお茶を飲むと安心するようになった。まさかと思ひながら恐怖心がふと消えたのに気付いた。単なる気力の喪失だろうか。行くままに任せるしかない。高さんも義兄もこんな境遇でどこかにいるに違いない。いつか会えるだろう。状況に抗うよりも来るものをじつと待つしかない。

XI日目

事の重大さにやつと気が付き始めたということだろうか。恐ろしいことが起こるのではないかと思うにも、それが突然

ではなかったので甘く考えてしまったのだ。そのせいか尋常でない状況にも、冷静「？」でいられたのだと思う。拘束には何の意味があるのか。意味が分かれば拘束にも理不尽な尋問にも、不服があつても耐えられる。無意味な環境に意味もなく拘束されることは、これほど恐ろしいことはないのに、その恐怖もじわじわとゆつくり体に浸み込んでくるだけだ。

こんな日々がどれくらい続いたかもう分からなくなつた。

同じ尋問、同じ時間。かなり長い時間だつたのだろう。尋問官は定期的に代わつた。それが時間の経過をやつと感ぜさせてくれた。彼らは相変わらず無表情だつたが、Tは交代するたびにそれぞれが分かるようになっていた。無表情の中でも、馴れ馴れしいもの、退屈そうなもの、妙に威張つた者、様々を見分けるようになった。Tは毎朝それらの顔に会い、理解してもらえない同じ言葉を発しながら彼らの細い眼を見ると安心感を覚えるようになった。

XXX日目

最初の頃、時間を持て余して、姉と二人で昔話をしたこともあった。Tは幼い頃、いやある程度成長してからも、母と姉の二人の女性に抱かれて夜を過ごしていたことを忘れていなかった。永遠に続くはずの安らぎと官能の感覚だつた。二人の女性の身体は柔らかくいい匂いがした。また美しい女学生になつた姉は活発で仲間の中でもいつも中心だつた。Tは

それを傍で見て嬉しただけだつた。家の中でも彼女の気配を身に受けると、夢の中で恋をしている自分を自覚して煩悶した。

この最初の姉と二人だけの二日ほどは、Tにその思い出を蘇らせ秘かに嬉しく思わせていた。だが今の彼女はすっかり生気を失つて、時々目が合うとうつすらと微笑を返すだけになつた。Tは気がふれるのではないかという前兆を察してどきりとした。

Tにはもう一つ小さな心配事があつた。以前はよく歯痛に悩まされた。何の前触れもなく、食事中などに突然歯痛に襲われることがあつた。それを思い出すと怖かつた。あの耐えられない痛みをここで味わつたらそれこそ地獄だ。歯の治療など尋問官に訴えたところで優しく対応してくれるはずはない。彼が朝晩の歯磨きをこれ以上なくらいに丁寧にするようになるのは当然だつた。

Y日目

もう何日経つたのだろうか。頭の中の芯がぼんやりして力がなかつたが、まだ自分の存在の意識を失つてはいけなという最後の思いが残つていた。思い切つてそれら振り捨てて絶望の中へ飛び込んで行けばどれほど気が楽だろうと、考えないでもなかつた。またその決心を秘かに待っている自分もまだ意識できていた。

解放される時を期待してはいけななのだ。それを希求する

と、希求しすぎると苦しみが増す。我々の希に奴らは無反応だ。その無反応に対するにはこちらも無力で対するしかない。解放への意欲を力づくで自分の心の闇に押し込めようとする、その葛藤で発狂するか自死するしかなくなる。

YY日目

ある朝、変化があつた。それは一種の救いのようにも見えた。朝食の後二人は作業着を渡された。着心地はよく囚人服とは違う。いつもと違う廊下を通つて連れていかれたのは広い部屋で天井は高く、田舎の小学校の小さな講堂が思い出された。百人ほどが机に座っている。壁は旗や壁掛けなどの色鮮やかな装飾で埋められている。一番後ろなので彼らの表情は分からないが、皆丸坊主で小柄だ。Tが座つても気にするものはない。氣力を失くした人間の影のようだ。東洋人に違いないが日本人とも中国人とも違う。わずかに目が青い。少数民族の一つだろうか。一部がカーテンで仕切られ女性たちが座っている。数は少ない。姉はそこにいる。

周りには銃を持った兵士が五人立っている。背広姿も三人ほどいる。ここは刑務所でなくても何らかの収容所であることは間違いない。何故ここにいるのかと思う前にTは慌てて抵抗しても無駄なのだと思ひ、却つて少しほつとした。

銅鑼がなつて小柄で小太りの男が壇上上がった。中国の人民服に似た服を着てやはり目が細い。この所長だろうか、皆が立ち上がった。所長が何か声を発すると、同じ言葉を発

して皆が座つた。おはようございます、と言っているのだ。尋問官以外で久しぶりに聞く他人の声だった。明るく飛び跳ねるような言葉だった。

所長は三十分ほど話をした。Tには理解できるはずはなかつたが、その声は宥めるように優しく眼は微笑んでいた。Tは眼を開けていたが頭の芯は眠っていた。最近はこの状態のまま時間を費やすことができるようになっていた。ふと気が付くと喉が渴いてお茶が欲しくなるのだが、そのお茶の効果ではないかと思つたりした。

話が終わると一同は立ち上がつて礼をした。所長が檀を降りると講堂の電気が消えて壇上の幕が開いた。大きな肖像画が照明に照らされて表れた。

軍帽を机の右に置いた軍服の将軍が表れた。周りに緊張感が走る。国王かも知らない。彼の細い眼からはちゃんと眼球が覗いている。やはり坊主頭だががりりしく氣品がある。少し微笑んでいる。安心して彼の前に平伏してもいいような氣を誰にでも起こさせそうだ。彼は優しく受け入れるはずだ。

壇上に教師らしきもののが上がり本を開く。一行読むと全員がそれを復唱する。Tの手元にも本はあるが読めない。くねつた文字の間に漢字らしきものがあるが想像もできない。それでも小さな声で合わせる。

長い時間で、Tは半分眠つていた。将軍か国王を賛美する上奏文なのだろう。何人かが次第に興奮して声を震わせ始めたのが分かつた。

次に国語の授業が始まった。小学生の教科書だろう。様々な絵の下に文字が書いてある。声を出して読む。Tはその日、父と母と馬という言葉覚え、忘れないように何度も口の中で繰り返した。

ここが何らかの収容所であることは間違いない。刑務所ではない。近隣の種族を捕虜にして洗脳教育をしているのだろう。自分がなぜここにいるかを考えないことだ。義兄や高さんがいないのが不思議だ。

授業が済むと昼食だった。明るい広い食堂で大勢と一緒に摂る。誰も無口だ。日本人らしきものはいない。食事を味わう事を忘れて、ただものを口に運ぶだけのようだった。

昼休みになると中庭に出たのんびり転んだりしている。中庭は壁に囲まれているが広い芝生で気持ちがいい。天気も穏やかで爽やかな風が吹き抜ける。そういえばここに来てからはもう相当の日が過ぎたのに毎日が穏やかな気候だ。

昼休みが終わると整列させられて体操が始まった。日本のラジオ体操に似ている。Tは何の抵抗もなく従った。

班ごとに分けられ、隊列を組んで荒地を行進させられる。乾ききった黒い地面をみな大人しく羊の群れのように歩く。白い毛並みがくたびれもせず ゆっくり進む。どれも寡黙で動作は鈍い。Tの班は三十名ほどで雑草の荒地に穴を掘る仕事につかされた。三時間ほど掘ると、大きな穴ができるが、今度はそれを埋めて元に戻させられる。三時間かけて埋め戻すと、その日の仕事は終わる。

穴を掘って埋め戻す事に何の意味があるのかわからない。あとで整地して畑にするのか。考えるのは不要だ。筋肉の気持ちのいい張りとは定期的に飲む冷たいお茶のおいしさが無駄なことを考える気は失わせる。精一杯の力で鶴嘴を打ち下ろす男もいる。表情は相変わらず無いが、その疲労を楽しんでいるように見える。

仕事が終わるともう夕食である。無表情の男たちも心地よい疲労と食事を楽しんでいる。終わると演壇で踊りが始まる。濃化粧の女達が踊る。弦楽器と笛に合わせて色とりどりの原色の薄い衣服をなびかせる。優雅な民族踊りだろうが、どこか猥雑で滑稽な感じがする。

それで一日が終わった。部屋に戻ると姉も帰って来た。ミシンと裁縫の一日だったということだった。少し微笑みを見せて元気を取り戻したように見えた。

YYY日目

こんな日がどのくらい続いたかもうわからないし、知りたいたとも思わなくなった。Tは労働が好きになった。筋肉の張りが心地よかった。腕の筋肉が形よく盛り上がってくるように見えた。そして疲れを欲した。いろんな労働に就いたが、内容はどうでもよかった。

働き過ぎ疲れ果て眠りに陥っていくときの快感、深い眠りに沈んだ安寧、目覚めた時に確かめる筋肉痛、これらはまさに自分が生きているという証だけでなく、それを確かめる喜

びでもあった。もつと疲れるのだ、とTは自分に言い聞かせた。

疲れ果てて考える力がなくなるまで自分を酷使するのだ。自分の存在を忘れるために消耗するのだ。気が付かないけれど薄絹のように体に纏いついた恐怖を忘れるために、思考力を捨てて感覚を麻痺させてしまわなければならない。

昔の生活は忘れてしまった。もうずいぶん昔のことだ。義兄や高さんの事は忘れてしまった。ここから逃げ出したいとも思わない。何処へ行けばいいだろう。家庭の事、役所の事、小美のこと、すべては思い出ではなく、印象の薄い切り絵が目の中の壁に貼りつけられているのを無感動に眺めている感じだった。住む世界が変わってしまった、今までの人生が無駄になった、意味は全くなくなってしまったのだろうか。

Z日目

気まぐれではない。ふと、空気が抜けるように意識がもとに戻ることがある。それは不吉な予感がする。また無駄なことを考えねばならないのだ。考え抜いて前へ進む真の道を見つけ、全力で取り組むことが人間の正しい生き方なのか。そうやって生きてはこなかったが、おそらくそうあるべきだろう。だが自分はそうではなかった。なぜなら、自分がそうであろうとしようにも、滑稽なうすら寒い下手な茶番劇に立ちすくんでいる自分しか見えなかったからだ。そして見て見ぬ

ふりをしてきた。

Tがそんな自分を顧みる気になったのは不思議だった。自分の不吉な行き先を予感していたのかもしれない。おそらくTの最後の意識とその表示だったろう。

その日は頭の中が冷たく、はつきりと何かを考えることができそうだった。いつもの講堂での学習や食堂での演戯会を眺めるうちに、自然にその空々しさと滑稽さが胸に小さな渦を巻き始め吐き気を覚えるまでになった。小学校のような子供騙しにはもう従うつもりはない。

Tにとつては生涯で初めて感じた自意識で、初めて得た力だった。何故そんな気になったのかわからない。この収容者に慣れ、門外漢のように眺めていて余裕も出てきたのだろうか。もう外には出られないという諦めを無意識のうちに知ってしまったからだろうか。身体が強くなってくるとそんな力に似た自信が湧いてくるものなのだろうか。

ある日二人は呼び出しに応じなかった。ベッドに座ったまま壁を黙って見ていた。兵士が何度声をかけても応えなかった。長い時間が経ってドアが閉まった。ここまできると何か展開があるかもしれない。少しの不安はあったが、新しいことが見えてきそうな気がした。

兵士は毎日呼び出しに来たが、ある時を境にして来なくなった。食事は毎日同じように出たので安心だった。ほつとした安心感、気が付くとすぐに不安に変わっていた。しかしジツとこのまま待ち続けること以外にできることはないし、それに意志と力を込めて耐え続けなければならない。覚悟することだ。何を待つかわからぬまま何かを待たねばならない。Tは覚悟することをはっきりと再確認した。それに構えて耐える準備をしなければならないと決心した。まずは体を壊してはならない。与えられた食事を必ず栄養として体内に吸収すること。少なくとも新陳代謝を正しく進める事。そのためには毎日適度な体操を続ける事。虫歯にならないように丁寧に歯を磨く事。

決めてからの一日は過ぎるのが早かった。ラジオ体操をゆつくり繰り返し、屈伸腹筋背筋の運動を丁寧にして、部屋中を歩いた。時間が空いても、姉と話をすることはもうなかった。そんな時はベッドに横になって数を数えた。二千まで数えると心地よい昼寝になった。

とくに歯磨きには時間をかけた。箸で磨き指で磨き、木屑で歯間を穿った。最後に何回も口を漱ぐと爽快な気分になった。

全ての動きに回数を決めて、心地よい動作は回数を増やした。

気分のいい日々が過ぎて行つた。しかしそれがどのくらいの時間であつたか全くわからなくなった。不安や恐怖を自意識から追い出し、見ぬふりをするのは容易かつた。部屋に鏡がないので表情がどんなに変つたか見ることもできない。時折、講堂の研修や労働の日々が思い出されようとする、ちよつとした懐かしさを感じたので、Tはそれらを意識して考えから排除した。遠くから群衆のざわめきが風に乗つて流れてきたが、すぐに消えた。

無為の時間を、ただ過ぐす事だけの目的をもつて過ぐすのに、人間はどこまで耐えられるか。不安と恐怖に眼を背け、一滴たりとも残さず心から排除できたら、それは至福の時間と言えるのだろうか。それともそれを発狂と呼ぶのだろうか。熟睡ができなくなつてきた。それで疲れを欲して、夕食の後には激しい運動に没頭するようになった。腰が痛くなり腕がこわ張つて動悸が激しくなつた。ベッドに倒れ込むようになった。すると女の囁きか忍び笑いのような声が耳もとにしてくる。下品な誘惑の猥雑な声だ。Tはなぜか涙ぐんでその声にすがりつくように聞いた。

眠つたままなのか、覚醒しているのかどう分からぬまま、Tは黄色い霧が水色になり無彩色になつていく時間の流れに溺れていた。忍び込んで来る恐怖を感じないまま、怖れていたそのものに取り込まれてしまつていた。それは安寧であり、Tにとっては意識の外、秘かに望んでいた至福の時でもあつた。

た。全身は綿のように軽くなり、頭の髄は痺れていた。

確実に毎日のプログラムをこなした。何日も続くと、回数も動作の順番も気を付けなくても間違ひなく続けられた。一日は早く過ぎた。何も考えなくても問題なく一日を過ごす事ができるようになって自信が持てるようになった時、突然時間の感覚が無くなった。日々の流れていくのが早かった。過去の出来事をふと思ひ出し考える時も、それが何日も繰り返されて続くのをぼんやり感じるだけだった。間違ひなく生きているのだけは認識できた。それになにか理由が必要だっただろうか。

ある時、Tはいつもの囁きがさらに悲しげに艶めかしく猥雑に耳元に流れているのを、眠ったまま感じた。朝か夜かはもうわからない。手さぐりでそれに触れてみるとそこには姉が寝ていた。すべての籠が外れた。甘い唇と匂いは安らかな時間の一步だった。姉は正気を失い薄ら笑いを浮かべていた。顔をこちらに向けても眼は何も映していない。柔らかな肉体と白い布に包まれた懐かしい幼児の時期が蘇り、それから時代は紙屑のように飛んで消えてしまった。禁断の快楽は限りなく沈んでいく静かな破壊への道のりだった。

数日後、痴呆状態になった姉は連れ出され、Tは一人になった。日ごと、時間ごとに意識は薄れていった。再び遠くから人々のざわめきが流れて来た。遠雷のようなオートバイの爆音が微かに混じっていた。

第三章 病む土群

「一 働け、無為なる人々よ」ドストエフスキー

朝、我々は不毛の荒地に立ちすくんでいるのを発見する。昨日、一昨日あるいは一年前の朝もそうであったかもしれない。だが我々は記憶喪失症のようにこの暗い風景に眺め入る。初めて出会う風景でありながらなぜか懐かしい。そして我々はごく普通に慣れた態勢で何の不思議さも覚えずそこに立つ。太陽が昇りかける直前に荒地は陰鬱で湿った光を放ち始める。しかし我々は太陽を見た事はない。暗い光の中に荒地がボンヤリ浮かび上がっているだけである。

我々は短い列を作つてただつ広い荒地を進んで行く。石ころの間の溶け残つた雪が我々の脚を奪う。歩行と共に辺りは暗くなる。息絶えんとする獣の叫びのような寒風が耳元を錐のように突き抜ける。この寒さだとまた大雪が降るだろう。我々の作業服と長靴だけではこの寒さはあまりに敵しい。耳朶は凍傷のため全く感覚がない。痛みが疼いてきた時に切り落としてもいいだろう。手袋は糸屑のようにぼろぼろだが、凍傷の指を切り落とすまではまだ間があるだろう。

我々は小高い丘の斜面を切り崩していくのだつた。爆音と白煙が収まると美しい岩石が露になっていく。純白の岩石は白夜のような光を精一杯反射して輝きながらうねる。美しい

と思うより前に眼をそらす。

我々の作業はシャベルで岩石をトラックに運ぶことだった。一杯になるとすぐに次のトラックが姿を現した。我々は急がず同じ作業を十数時間続ける。腕と腰は激痛から鈍痛へ、そして何の感覚も無くなってしまう。指はシャベルを握ったまま開こうとしない。あばら骨が音を立てて潰れ呼吸が止まる。だがシャベルは生き物のように動き続けるのだ。我々の眼はもはや輝く岩石も何も映してはいない。

我々は夢を見始める。巨大な綿花の山に包まれて飛び跳ねているようだ。光が霧のように降り注ぐ。我々は綿花の山を切り崩していく。我々の身体は崩壊して綿花の一部になって柔らかく転がっていく。

我々の身体はもはやいかなる疲労も苦痛も感じなくなっていた。疲労が凝り固まって肉体を感じることができればそれは一種の快感である。折れた足を鎖に絡めて歩けばそれは悲しみになる。鞭うたれ傷つけられるということはその反動で希望を感じることもある。しかし我々はただ朦朧としていた。白い岩肌群がる男たち。砂糖に群がる蟻であるが、無造作にその頭を押し潰しても誰が苦痛を感じるだろう。

我々は眠りかけて、というより気を失って小屋にたどり着き倒れたまま眠る。そして朝になるとまた新たな荒地を発見するだろう。前日と全く同じ姿を現すだろう荒地。我々は短いすべての時間を捧げるために起き上がる。

我々は何故、また何時からここにいるのか知らないのだった。ここに来る前はどんな種類の人間であつたさえ分からぬ。またこの重労働の意味は、何のために、誰のために。しかしその疑問は一瞬のものに過ぎない。答えが得られたとしても何の意味があるだろう。安息と快癒に興味がない我々にはすべての理屈は不要である。我々は永久に働き疲勞し続けるだろう。

我々は絶望しているのでも満足しているのでもなかった。ましてこの忍耐を自分自身に強要しているのでもなかった。誰一人として逃げ出そうとする者もいなかった。逃走した後の世界を想像することさえなかった。我々にはこの労働に従事すること以外になががあつたろう。

嵐や吹雪が荒れ狂う日、我々は仕事を休んだ。それは恐ろしく長い時間だった。風は地響きとともにやって来て小屋を吹き倒さんばかりだった。壁の隙間から大粒の砂と氷が吹き込んでくる。我々は誰一人この暗い沈黙の世界を耐えきれぬものはいなかった。我々は二人あるいは三人でベッドで絡み合つて戯れた。しかし決して笑い声は漏れてこない。我々の荒い息づかいが真剣でむしる殺意に似ている。我々は互いに体を愛撫し合い快楽を貪り合つた。何度も繰り返す。消耗しつくす事、この暗い時間を費やすのにそれ以外に為すことを知らないのだった。

「二 現存の頽落」ハイデッガー

ある日部屋に戻ると、一人の少年が部屋の隅に蹲っているのに気付いた。彼は逃げ出すことのできないのを悟って震えて泣いていた。産毛のような頭髮は薄明るい光に透き通って可愛い顔にかぶさっていた。その眼は哀願で我々を見つめていた。我々は彼が何を怯えているのか、また我々に何を感じているのか分からなくて戸惑った。その様はかえって我々を委縮させ気恥ずかしさを覚えさせた。

翌朝も彼は蹲ったままで一睡もしていないらしく見上げる臉は腫れ白眼には血が滲んでいた。

その日はひどい嵐で我々は仕事に出かけなかった。格子窓からは急速度で駆け抜ける赤黒い陰惨な形相の雲が見えた。小屋は砂を叩きつけられる風に吹き倒される寸前だった。我々は風の雄叫びを聞きながら黙って少年を見つめていた。我々もここに来たばかりの頃は恐怖に囚われて泣いていたのだろうか。何が哀しいのか。今までの世界ではその涙は朝露のように膨らんで煌めいていたに違いない。我々は嫉妬を感じながら何時間も彼を凝視した。視線を感じて彼は時折目を上げたがそれははっとするほど美しかった。

我々は不思議な観念にとらわれ始めた。彼は今まで見た事のない不思議な生き物だった。その胸板を切り刻めば生臭い体液が噴出し、頭髮は血に濡れて黒光りするに違いない。それさえ不思議に思われる。我々は彼をどのように残酷に扱っ

たらいいのか。ただうつとりとこの奇妙な生き物が微かに動くのを溜息混じりに見つめているだけだった。

我々は何時間そうやっていただろう。彼はあまりに無垢であり、指一本触れず、一言も掛けずそれに触れるには我々は微力だった。そして我々をさらに惑わすのは、見つめ続けていると、ふと早朝のそよ風が蘇ってきそうな気になることだった。我々は慌てて気をそらした。

暗黒の闇が迫って来た。ついに彼は我々の猟奇に満ちた凝視に耐えられず、それを振り払うようにいきなり立ち上がるのと怒りのような痙攣を起こして再び倒れ、意識を失ってしまった。看病する余裕はなかった。我々の一人が彼の衣服を剥ぎ取りベッドに引きずり込んだ。彼の身体は思ったより成長していた。我々は次々に彼を弄んだ。彼は意識を失っても眼は開いたままだった。あまりに恐怖が大きいのか、我々の愛撫が身動きできないほどの快感なのか苦痛であるのか。

深夜になつて嵐は止んだ。暗黒の静寂に微かな風のそよぎも聞こえなかった。あまりの静けさに我々は長い間眠ることができなかった。だが、眠りに陥る寸前に遠くから聞こえてすぐに消えた音を聞き逃すことはなかった。誰もが、あれはオートバイだと囁き、深い郷愁に陥って眠った。

再び長い労働の時間が始まる。荒地は冬の荒々しい息吹に満ちむしろ生き生きとして見える。凍てついた地面は我々をいかにも優しく包むようだ。我々は黙々と進む。

少年が労働に加わるようになった。だが彼のか弱い身体はたいした働きをすることはなかった。必死の形相でシヤベルを岩肌差し込むも跳ね返されて僅かの砂を運んで一工程が終わるだけだった。それでも彼はこの仕事に情熱を注いでいるように見えた。それは彼が我々の誰よりも自分の肉体を愛しているということ物語っていた。か弱いシヤベルをがむしゃらに突っ込むその健気な姿はむしろ我々に悲しみをつき上らせた。我々は恐れて見つめるだけだった。

ただ我々は無関心を装って黙って仕事に励むふりをする。それでも氷の砂塵に彼の姿が隠されてしまう時など、手を停めて彼を探した。気が狂って方向を失い、さらなる不毛の果てへ疾駆していったのではないかと。

肉体を虐げる労働の時間から解き放たれると、人間には不安と恐怖しか残らないのだろうか。仕事を終え小屋にたどり着くと少年は気を失うか眠りにつくまで呻き声と泣き声をやめなかった。我々は彼を哀れんだ。泣き声はこれ以上瞬時も耐えられないほど悲しげだった。呻き声は動物的で呪いに満ちて苦しげだった。我々は二度と彼を弄ぶことはしなかった。なぜ彼がこれほど苦しんでいるのかわからないまま、彼を優しく抱きしめてやりたいと思うばかりだった。

彼は急速に弱っていった。すっかり老いてしまつて少年の顔つきはもうなかった。伸びきつた頭髮の間から覗く眼は狡猾な怯えて微かにも光らなかつた。それでもまだ子供であった。彼は度々仕事にも出てこなくなつた。そんな時我々が部

屋に帰ると、仕事に出た時よりもつと疲労し、そして絶望に陥っている彼を見るのだった。耐えられない恐怖に襲われたように両眼を開いて天井を向いたまま気を失っていたりした。我々は彼の死を予感するようになった。彼の苦しみが哀れで仕方がないというだけではなかつた。彼の苦しみと悲しみが理由も分らないまま我々を細菌のように犯してくるのだった。我々はその不安に耐えきれそうになかつた。

彼はもはや少年という一個の人間ではなかつた。彼は我々の最も敏感で柔らかな無防備な部分だった。我々自身に残されたなんとという弱々しい部分だろう。もし我々が彼の肉体にちよつとでも指を触れたなら、それは神経だけをいきなり爪で荒々しく引き裂く衝撃となつて、むしろ我々を襲うだろう。我々は少年の死体を夢見て希求した。我々は少年を殺害すべきか、それが我々の苦痛を根こそぎ取り去ってくれるはずのものだった。それは救いだ。そのくせに我々は誰も彼に指を触れる事さえできなかつた。その存在を感じるだけで我々は妙に委縮した。

今や我々は一つの映像に覚め苛まれていた。それは郷愁のように涙を誘つた。いくら頭を壁に叩きつけても消そうとしてもだめだった。静寂の闇の中に浮かんでくるのは、純白の岩石の連なる丘を一散に駆け抜けていく少年の映像だった。赤黒い愚鈍な雲が空を押しつぶすが、映像は夢のように次々に展開して続く。海辺の波打ち際を大きな太陽を背にして少

年はスローモーションで駆けていく。光を反射して波が煌めく。衣服は向かい風を浴びて緩やかになびく。頭髮は産毛のように細い金色に輝く。

我々は慟哭する。殺害すべき獲物を取り逃がした悔しさではない。触れてはならないものに触れ、まさに愛する者を失ったのだ。我々は再び暗澹たる生活に戻っていく。もう我々はおかつてのように肉体を酷使し、その滅びていく恍惚感に浸り確実な快感を確認する事もないだろう。愛する肉体の思い出にすがりつきたいと思いつながら、そこへ還つて行くこともないだろう。我々は荒地に住む海の生き物。沢山の触手でかたくなに身を覆いながら、今にも流れ出しそうな湿った柔らかい生き物。重く腫れぼったい瞳をゆっくり閉じて、繁殖することを知らない腐敗菌のようにしばらく蠢いてから枯渇していくだろう。

涙と嗚咽の合間に浮かんでくるのはもう一つの映像だ。小屋を包む暗黒の闇と、かすかに姿を現す太陽の光が交互に点滅する。記憶はすでに消えてしまったが、その郷愁だけが蘇る。あれは単なる憧憬でしかなかったのか。いつから我々はそれを忘れてしまったのか。次第に強くなつていく光に涙が煌めく、そんなこともあつたような気もする。しかしどうしても思い出せない。我々のこの檻褸布のような集団はただ絶望して待ち続けるしかないのか。我々を優しく包む征服者はどういうのか。最後に残つた我々自身を誰に捧げればいいのか。

我々は再び不毛の大地にいる。厳寒の乾ききつた風が猛り狂つている。過去に死んで行つた多くの人間たち、虐殺されたり、自死したり不慮の事故で死んで行つた人々の呪いと悲しみの叫びを運んでくる。我々には罪がないのは当然だが、後悔もない。我々には妙な落ち着きがあつた。太陽が再び昇らないということを我々は知つていた。もはやそれを望んでもいなくなつた。

意に反して蠕動する血管と筋肉と内臓を己自身の手で抹殺する瞬間を待ち続けるか。あらゆるものに耐えてその時を待つ。そうだ、我々もつと愚かになるべきだつた。未来を拒否すべきなのだ。ハンマーの一撃で動かなくなる家畜よりも鈍感になるべきなのだ。

我々の一人が少年の頭にシャベルの一撃を加える。彼は長い首をぐんにやりと曲がらせて床に崩れ落ちる。我々は誰も後悔はしなかつた。あまりにあつけなかつた。もしかしたらこの少年は偉大な予言者ではなかつたのか、あるいは偉大な征服者。そして我々は次に何が起こるかも知つていた。

「三 現存の日常 偽りの太陽」

長い陰鬱な生活が再び始まつた。しかしかつてのように一日の生活の確信を持つことはなかつた。黙々とただひたすらに肉体を痛めつけていく、そんな快感はもはや無味乾燥な空々しい戯れに過ぎないように思われた。岩石に打ち込むシャ

ベルは重くなるばかりだった。伝わってくる振動は我々をただ惨酷に疲労させた。我々は風化した板切れ、引きちぎられた布切れのように何の官能もなく空つ風に吹き晒されていくだけだった。

我々は次第に湿気に身体を腐食され始めていた。至るところの関節は錐を刺しこまれるように痛み、五体の力をすつかり抜いてしまった。節々は水でふやけて感覚がなくなっていた。ある者の身体の傷口からは血の変わりに真っ黄色の膿が噴出した。もう生活には耐えられなかった。我々は死を恐れただ。死は苦痛の最大限だった。

我々は仕事に出て行かなくなつた。小屋の中で一日中寝転び、呻き声をあげ悶えてその日を送るのだった。かつて我々を奮い立たせ、逞しく快感へ向かつて着実な歩みを促していたものは一体何だったのか。満身の力を込めて振り絞つた勇氣はどうなったのか。今はただ何の対象もない怯えと共に時間を過ごすだけだった。愛する肉体を失っているのだけは確かだった。

我々は数日おきに監督官の視察を受けた。それが数年おきのことだったか時間の感覚のない我々には分からなかった。

た。我々がそれを欲した時に彼が現れるのだった。彼は軍服を着てハンマーで床を打つような重い靴を履いていた。我々はベッドの前に整列して彼を迎える。彼は小柄で丸坊主の小さな顔を持っていた。そして機敏な動作で少し飛び上がり気

味に次々に我々の顔を殴りつけるのだった。我々の耳には激痛とささやきが残る。

「私はお前たちの存在を意味するために働かせるのだ」

その声はなんといい優しさと真実味をおびていることだろう。あるものは顔を抑えて蹲りあるものはうつ伏せになって気を失う。監督官は倒れているものの頭や脇腹を容赦なく蹴る。小屋中が呻き声に包まれるがそれは恨みや憎しみではなく恍惚感に似ている。

やがて砂塵が一粒ずつ音を立てて小屋の壁を打つ音が聞こえて来る。静寂が訪れる。しかし我々にはその静寂に浸っている暇はない。ある感情が膨らんでくる。この時間こそ我々には耐える事の出来ない時間だった。我々はさめざめと泣き始める。理由のない懐かしさに溢れた幸福感。体内に熱い涙が落ち、ゆつくりと膨らんでくる感動。我々の涙は深い悔悟に変わる。我々は己を愛することにいかに怠慢であったことか。いかに欺瞞に満ちて卑屈に己自身を呪縛していたことか。労働の名を借りて偽りの自己満足に陥っていたことか。

断罪されるべきだ。切り崩されていく岩石がた。だ海に捨てられるだけの事であつても後悔はしない。そうだ、我々は無意味に殺されて行くためにひたすら労働し己を愛するのだ。なんという恍惚感だろう。胸の中を何度も甘つたるい大きな波のうねりが通り過ぎる。

遙か昔の記憶が微かに蘇り、我々の涙は止もうとはしない。

朝の太陽を浴びて我々はとうとうとしていた。裸の全身を心地よい風が通り過ぎる。頬ずりしたくなる愛しい肌。腕の中には可愛らしい小さな生き物が息づいているようだ。唇でそれを愛撫し優しく包む。我々は喜びに満ちていた。だがそれは現実だったか、ただの夢だったか、または空々しい紙芝居であったか。あまりに昔のことだ、我々の先祖の記憶なのかもしれない。

太陽が突然、強烈な巨大な炎の塊に豹変した。我々は灼熱と怒りの光に立ちすくんだ。我々はかつての愛する時間を何の惜しげもなく捨てた。今ではすべての愛しいものは憎悪の対象でしかなかった。我々は太陽を希求し崇拜しようとしていた。しかし我々はそれが偽りの太陽であることを無意識のうちを知っていた。そして忘れようとしていた。そのことが我々をさらに感動させた。太陽が全てを焼き焦がし枯渴させていく事に狂喜した。太陽は破滅に向かって燃え滾っていた。我々は肌が焼きただれて乾き、風化していく事に興奮した。太陽は死と官能の象徴だった。我々は長い間、征服者を待ち続けていたのだ。太陽を背にして我々を歓喜の怒濤に巻き込む征服者を。死を愛する勇気を我々の肉体に迸らせる征服者を。

我々がかつては熱狂する軍隊であった。灼熱の砂漠をあるいは廃墟の中を行進した。規則正しい我々の軍靴の音は怖れ

を知らなかった。死は我々の味方だった。我々の総督はいつも巨大な太陽を背にして演説した。我々は狂気の叫びで彼を称賛した。彼の掘りの深い顔は汗と油で輝いていた。我先にと投げキスを送る群衆。祝福の紙吹雪が隊列の頭上に大理石の粉のように舞う。我々は戦いを好んだ。破壊を好んだ。彼は叫ぶ。「死よ万歳」猛り狂った群衆の声。そうだ征服者は破壊と滅亡を愛していた。熱狂と興奮に包まれた我々の偉大な征服者。

「三田文学」の自作より一部抜粋

2022年8月2日